

読書の秋となりました

昼間の時間が随分短くなったのを感じるこの頃です。夏の頃は夕方の7時頃まで明るかったのに今では午後5時という薄暗くなります。このような秋の夜長は本を読むのに最適の時期です。学校でもこの時期、読書週間ということで色々な取り組みが行われます。

1月4日(水)には、図書委員会が中心になり読書集会が行われました。はじめは前の週に計画されていたのですが、インフルエンザの流行もあり延期され4日になりました。読書集会は次のような内容で行われました。

(1)読み聞かせ「こんたのおつかい」

「こんたのおつかい」という絵本をパソコンに取り込み、それをスクリーンに映しながら、図書委員会の児童が声優として物語を演じます。

主人公の「こんた」が、お母さんにおつかいを頼まれます。森の道を通っていくと、途中で鬼やお化けが出てきておどします。怖くて何を買いに行くのか忘れてしまう「こんた」ですが、無事お店にたどり着き、お母さんに頼まれたものを買うことが出来た、というお話です。鬼やお化けが出てきても決して怖い話ではなく、何となくユーモラスでこども達が大喜びな楽しい話でした。

(2)パネルシアター「にゃーご」

1匹のねこと、3匹の子ネズミが登場します。お母さんネズミが、子どもたちに「ねこに気をつけるんだよ。」と注意します。でも、こども達はねこを知りません。その恐ろしさも知りません。3匹の子ネズミがねこに会いました。子ネズミはねこと一緒に桃を取りに行こう、と誘います。誘われたネコは、「ようし、この子ネズミたちに桃を食べさせてから、丸ごと食べてしまおう。」と考えます。

ねことネズミはたくさんの桃を食べ、何個かの桃を土産に持ち帰ってきました。ネズミが1個ずつ、ねこも1個の桃を持っています。子ネズミたちは「この桃を妹にあげよう。」とか「弟にあげよう。」と話しています。そして、ねこに尋ねます。

「にゃーごおじさん、おじさんには家族はいるの。」

ねこはこたえます。

「子どもが4ひきいるんだよ。」

子ネズミたちは、言います。

「それじゃあ、足りないね。ぼくの桃をあげるよ。」

別の子ネズミも言います。

「わたしのもあげるわ。」

そんな物語を図書委員会のこども達が、ねこや子ネズミになり上手に演じ(せりふで)ます。とても心温まる物語でした。

その後、2つの物語からのクイズがありました。8問の問題にほとんどの子が正解しました。とても物語に集中していた証拠だと思います。楽しい図書集会でした。

「こんたのおつかい」



「にゃーご」



どんな本をお読みですか

現代人は本を読まなくなつたと言われます。一番の原因は忙しさでしょうか。それ以外に楽しいテレビ番組、テレビゲームの普及等々、原因は色々でしょうが。保護者の皆さんも自分の子どもの頃と比べ、今の子の読書離れが進んでいるように思っているかもしれません。

では、読書の効用とは何でしょうか。本を読めば何か良いことでもあるのでしょうか。今の世の中、本など読まなくても生きていけますし、必要な知識や、情報はテレビや新聞などで得ることが出来ます。わざわざ本を読む必要はないのかもしれませんが。

でも、本を読むという活動は、活字を追いながらその場面を頭の中に思い描いているのです。活字を自分で映像化する、という操作を繰り返しているのです。この操作が、想像力を膨らませ、豊かな人間性を形成するのに役立つように思います。

さて、皆さんは「読書治療」ということばを聞いたことがありますか。私も講演会で初めて聞いたのですが、心に病をもつ青少年の育成に本の力を活用した取り組みです。

例えば、不幸な生い立ちで、人から裏切られ、人の善意を信じる事が出来ず、今現在、心が荒(すき)んだ生活をしている少年や少女に、同じような境遇から、周りの人々の温かい励ましや本人の努力により立派に更正した人物の伝記を読むことを勧めます。その伝記を読むことを通し、感動させ、気づかせ、読み手の心を動かし、生き方を劇的に変化させよう、という方法です。

この時、1冊の本に心から感動し驚くような変化を見せる場合もあるでしょう。しかし、そのようなことは希で、実際には目に見えるような大きな成果は表れにくいそうです。でも、一度読んだ本の内容は人の心の奥底に記憶として留(とど)まります。そして、読み手の考え方、生き方に少しずつですが影響を与えます。同じような傾向の本を何度か読むことで、確かな力となり心を成長させます。その結果、人に対する信頼感を育(はぐく)み、自分自身を大切する心を育てていくことになります。

どんな本が「読書治療」に使われるかという点、論説文や評論文でなく伝記や小説が多いようです。普通考えると、論文の方が、その命題にストレートに迫っているのが良いように思います。例えば、「生命(いのち)の大切さ」とか「生きることの意義」「人を愛すること」などです。しかし、大上段に構え、「…だから…しなさい。」「…することが大切だ。」というように一方的に正論を押しつけられると、読み手は、「確かに理屈ではそうだよな。でも、理屈通りに行かないのがこの世の中なんだ。」と反発する心が芽生えることがあるからだそうです。

それに対し伝記や小説の場合は、読み手が、小説の主人公(または主 おもな登場人物)や伝記の主(ぬし またはその主人公に大きな影響を与えた人物)に自己投影(一体化)します。読み手は登場人物や伝記の主(ぬし)になりきり、悩んだり、悲しみに沈んだり、喜びに心を震わせます。「本を読む」という行為を通し無理なく自然にその人物の生き方や考えを自分自身に取り込むようになります。

考えてみれば、この読書治療は何も青少年だけが対象とは限りません。年齢を重ね頭や心がさび付いた私のような大人にも有効なものといえます。人は本を読むことで新しい知識や考え方、生き方を取り入れ、今までの自分をつくり変え自分自身を成長させていく生き物です。忙しい中ですが、お互い時間を見つけて読書に親しむ時間を作りたいものです。